

# 発刊にあたって

## －「讃岐香川における歴史的都市の諸相」という視点から－

香川県埋蔵文化財センターでは、2007年秋に企画展「海に開かれた都市」（香川県歴史博物館と共催、会場同館）を開催し、2009年度から讃岐国府跡探索事業を継続中である。前者は高松の母胎となった中世港町・野原について、後者は古代讃岐国の行政中枢である讃岐国府へのアプローチであり、ともに讃岐国の地域形成に多大な影響を与えた場の研究と言える。

本号では、「讃岐香川における歴史的都市の諸相」という視点から、①讃岐国府跡の過去の発掘調査で出土した遺物の紹介、②港町野原の場の特徴をめぐる討論と、当センター職員が異動先で関わった③香川県庁舎南庭の考古学的な検討を行った。

「都市」は、現代人にとって自明の存在のように映るかもしれないが、歴史の研究においては何ををもって都市と見なすか、という前提部分が問題になることがある。しかし、そうした議論は取りあえず措くとして、「大地に対する即自的な所有から解放された人々のうち、主として非農耕的労働に従事する者が、共同体・共同組織をともなつて集住・定住する特定の社会＝空間領域」を都市とする吉田伸之氏の大らかな見解（吉田2001「城下町の構造と展開」『新体系日本史6 都市社会史』）に依拠しておきたい。

都市の全体像を見渡すことは、物質資料を通して歴史を考える考古学に荷が重い課題である。しかしこのことは、考古学だけに言えることではなく、他の分野においてもあてはまるであろう。反面、都市を構成する様々な要素を丹念に見つめることなく、都市の全体像を描くこともできない。現代の我々が暮らす都市についてのイメージが、いきなり都市の俯瞰的な全体像ではなく、日常的に接する景観や場所、人を媒介とすることを考えると、このことは肯けるであろう。その意味では、本号が結果として都市の歴史的な構成要素の断片的な各論という体裁を取るのには、仕方のないことと言わざるを得ない。

「讃岐国府跡の出土遺物」は、個別資料の紹介に留まったが、国府跡想定域で広範に出土する中世土器の存在が、11世紀から14世紀前葉まで機能していた留守所との関係でどのように評価できるかが、今後の課題であると考えられる。高松平野や丸亀平野でデータの蓄積が進みつつある、土器組成（数量比）という観点からの検討が必要と考えられる。

「討論 港町の原像－中世野原と讃岐の港町－」は、『南海通記』等の記載から「さびれた漁村に新たに建設された高松城下町」というイメージに大きな修正を迫る議論となっており、城下町に先立つ中世港町・野原が、どのような「場」であったのかに焦点が当てられている。結果的には、考古学・文献史学・経済史学等から見える様々な事象を繋げることで、それを成り立たせている背景としての「都市性」が、改めて問題になったと言えよう。しかし、断絶的な要素とともに姿を変えつつ通底する連続的な要素も地域内に存在するはずであり、城下町へと継承されていく要素を見ていくことも重要である。この点は討論では明確にできなかった課題であり、近世史研究からのアプローチが求められる。また、それぞれの分野の異質な思考方法が必ずしもうまく繋げられなかった点も課題であり、このような試みを今後も継続していくことの必要性が感じられる。

「香川県庁舎南庭の基礎的考察」では、「都市のコア」として構想された南庭について、考古学的手法で設計案の変遷や、竣工後の改変状況について検討し、そうした知見の背景を設計担当者や関係者の回顧証言から整理している。「建築の考古学」ということが最近言われているが、学史的には建築史の方法や概念を大きく吸収して成立したのが考古学であり、寺院や宮都・城郭研究では現在でも両者の関係は密接である。この関係は、現代（近代）建築においても成り立つであろう。また現代建築固有の問題として、創作における伝統理解の一つとして考古学の成果が用いられている点があり、その理解が学問的に正しいかどうかと見のではなく、考古学と社会との関係（社会への受容形態）という観点で捉えることができる。「近現代考古学」がもつ2つの意味（近現代の考古資料、近現代史における考古学、福田敏一2005『方法としての考古学』）と関わる問題であろう。

最後になるが、現在も変化を続ける都市（地域）の歴史的理解に、その果たす役割の幅広さと可能性が考古学にはあると言えるのではなかろうか。本号は、その試みである。